

生業活動における 資源分配の構造と出かせぎ 青森県内の二つの漁業集落を事例として

Why Seasonal Workers Can Come Back
to Their Hometown?

葉山 茂

はじめに

- ①出かせぎがさかんな小泊村とさかんではない佐井村漁業集落
- ②漁場拡大型の小泊村と沿岸漁業型の佐井村
- ③通時的な視点からみた資源利用の形態変化
- ④資源の分配をめぐって
- ⑤まとめ

【論文要旨】

本稿では、漁業集落の出かせぎをとりあげて、出かせぎが可能になる生業の条件について検討した。一般に、出かせぎは人びとを地方から都市へと押し出す力であるプッシュと、都市が地方の人びとを引き付ける力であるプルの2つの力によって説明をするプッシュ・プルの構図によって理解されてきた。しかし、プッシュ・プルの構図は、出かせぎを説明するものであると同時に、過疎化の原因を説明するものとしてもつかれてきた。つまり、プッシュ・プルの構図は地方から人びとが都市に出ていく原因を論じていたのである。

しかし、出かせぎは「出ていく」と同時に「帰ってくる」ことによって成り立つ経済活動である。つまり「帰ってくる」ことを説明しなければ出かせぎを説明したことにはならないのである。そこで、本稿では「帰ってくる」原因を出かせぎ者たちの地元の生業における資源利用の形態に求めた。

本稿では青森県内の小泊村と佐井村という2つの漁業集落を取り上げた。両村は漁業がさかんであるが、小泊村は出かせぎも過去からずっとさかんであったのに対して、佐井村は出かせぎがほとんどおこなわれてこなかったのが特徴である。両村を比較すると、小泊村が一貫して資源獲得型の漁業をしてきたのに対して佐井村は一貫して閉鎖型の漁業をしてきた。資源獲得型の漁業をしてきた小泊村の出かせぎ者たちは、数十年にわたって出かせぎをして地元を離れていても漁業協同組合のメンバーから外されることはないのに対して、佐井村の出かせぎ者たちは一年間漁業をしていないと漁業協同組合のメンバーから外されて漁業ができなくなってしまう。つまり、出かせぎ者たちが長期間にわたって地元を離れることはできる要因の一つは、地元の漁業に出かせぎから戻っても居場所があるということに求められるだろう。出かせぎという経済活動をとらえるには、生業における資源利用の形態や資源の分配方法にも目を向ける必要があるだろう。